

ロビン・フッド研究の一動向

遠山 茂樹

はじめに

ロビン・フッドに関する研究は、汗牛充棟、枚挙にいとまがない⁽¹⁾。問題は多岐にわたるが、大別すれば、次の三点に絞られよう。ひとつは、ロビン・フッドは実在したのかどうか。いたとすれば、それは誰であったのか、という問題。換言すれば、ロビン・フッドの史実実在性をめぐる問題である。もうひとつは、ロビン・フッド伝説はいつ誕生したのか、という伝説の起源をめぐる問題。そして、ロビン・フッド・バラッドの聞き手はそもそも誰であったのか、という聴衆の問題である。これらの問題が相互に関連していることはいうまでもない。

本稿の目的は、従来のロビン・フッド研究をふりかえりながら、主要な研究者の論点をさぐり、近年のロビン・フッドをめぐる研究動向の一端を紹介することにある。具体的には、R・H・ヒルトン、M・キーン、J・C・ハウルト、D・クルック、J・R・マデイコット、B・ハナワルト、R・B・ドブソンとJ・テイラー、K・ドゥフリース、A・エイトン、T・H・オルグレンらの所説をとりあげる。

とりわけ、初期のロビン・フッド・バラッド群における庶子封建制の要素を重視するJ・R・マデイコット、弓術や

(1) ロビン・フッド研究の一動向

弓の射手に注目するK・ドゥフリース、A・エイトン、そして都市のギルドないしは商人のイデオロギーという斬新な問題視覚からバラッドを読み解くT・H・オルグレンの研究については、必要に応じてテキストからの引用も挙げながら、その論点を提示することにした。

本稿は、一九六〇年代から今日に至るロビン・フッド研究史の一断片であり、文字通り、筆者の「ノート」にすぎないことをお断りしておく。

一、ロビン・フッドをめぐる諸問題

ロビン・フッド伝説は、いつ、誰のためにつくられたのであろうか。この問題をめぐっては、周知のように、一九六〇年代に *Past and Present* 誌上で論争がくりひろげられた。論争の口火を切ったのは、ロドニー・ヒルトンであった。ヒルトンによれば、ロビン・フッド伝説は一三八一年の農民一揆において最高潮に達する農民階級の不満を反映している。「ロビン・フッドは農民の社会的闘争の副産物^②」であった。一揆の敗北によって農民たちの夢は打ち砕かれたが、その意思を受け継いだのがロビン・フッドにはかならない。端的に言えば、ヒルトンはロビン・フッド伝説に階級的性格をみるのである。モリス・キーンはヒルトンと同様の見解を表明し、ロビン・フッドを農民のヒーローとみなした^③。

こうした、いふなれば農民鼻根の見方に反論したのが、サー・ジェイムズ・ハウルトであった。ハウルトによれば、ロビン・フッド・バラッド群は、「もともととは不満をもった農民ではなく、ジェントリの文学」^④なのである。ロビン・フッド物語に耳を傾けたのは元來、王侯貴族、ジェントリ、そしてその家中役人であり、物語は移動する封建貴族の家

中を中心に、吟遊楽人や奉公人たちによって伝播・流布していった。このように、ホウルトはロビン物語の伝播の中心が封建貴族の家中にあることを強調し、その聴衆は生まれのよい保守的な人びとであったと主張する。こうして、ヒルトンやキーンとは一線を画するのである。⁵⁾

ホウルトによれば、ロビン・フッドの起源に関する問題を考える場合、アプローチの仕方は大別して四つある。ひとつは実在のロビン・フッドを同定しようというものである。実際にその候補者がいるとして、ホウルトは一二二五年七月にヨークで実施された巡回裁判の際に、「逃亡者」*fugitives*と記されているロバート・フッドの名を挙げている。

もうひとつは文学的なアプローチで、これはロビン・フッド伝説を文学作品としての騎士ロマンスに結びつけて考えるものである。たとえば、一二〇〇年頃にジョン王に反逆し、アウトローとされたウエイルズ辺境諸侯ブルク・フィッツツウォーリンの話や、一二〇三年に主君たるブローニュー伯に逆らって森へのがれ、傭兵として生涯を終える修道士ユースタスの話が類例として挙げられる。

第三の方法は、地理的なアプローチである。この方法によれば、ロビン伝説は名門貴族レイシ家の大所領に結びつけられることになる。広大なレイシ家の所領の中心はヨークシャのポンティフラクトにあった。このポンティフラクトの大所領には『ロビン・フッドの武勳』*A Gest of Robin Hood*（以下、『武勳』）の主要な舞台となったヨークシャ南部のバーンズデイルやランカシャのクリザロウといった領地もふくまれていた。

最後に人名からの接近法がある。これはロビンフッドもしくはそれに類する姓をもった人名を探っていくというものである。一例を挙げれば、一二九六年にはギルバート・ロビンフッドなる人物の名がサセックス州の徴税記録簿に記載されている。ここでは「ロビンフッド」であつて、「ロビン・フッド」ではない点に留意する必要がある。ともあれ、このような特異な姓があえて使われているということは、一三世紀末までにはロビン・フッド伝説がじゅうぶんに流布していたことの証左であるとホウルトは考える。⁶⁾

『武勳』のなかで話題となっている「州長官、ロイヤル・フォレスト、聖職者による高利貸しは、本質的に一四世紀というよりは、一三世紀の問題である」⁷⁾。こうしてホウルトは、ロビン・フッド伝説の起源を一三世紀にみる。当初ヒルトン説を支持したキーンも、自著の公刊後にアストンの批判をあげ、一九七七年に出された改訂版ではそれまでの自説を撤回し、ホウルト説に軍配を上げている。⁸⁾

ドブソンとテイラーは、ロビン・フッド物語群はエドワード二世（在位一三〇七～二七）および三世治世（在位一三二七～七七）期、すなわち一四世紀の社会情勢を反映しているとみる。¹⁰⁾ ふたりは、『武勳』のなかには州長官や聖マリア修道院長に対する反感が表明されているが、たとえば同修道院長が自己の借地人に不当な金銭を要求したり、過重な賦役を強要したりしている場面は見当たらないとして、ヒルトンのようにロビン伝説の内容を階級的な用語で分析し、過度に単純化してしまうことに警告を発している。¹¹⁾ 換言すれば、ドブソンとテイラーはホウルトと同様、ロビン・フッドを農民のヒーローとみる見方をしりぞけるのである。

他方で、聴衆に関しては、それがジェントリであり、伝播の中心が貴族の家中にあったとするホウルト説を批判している。吟遊楽人たちは毎年、主要な祝祭日に大広間に集まるよう要求された事実を考慮すると、大部分の吟遊楽人は貴族の家中に集まってくるよりも、さらに大きな聴衆―大市ないしは都市に集まってくる聴衆―の面前でより多くの時間を費やしたかもしれない。このように述べて、ドブソンとテイラーは、一三世紀においてすら、王侯貴族の家中をロビン・フッド・バラッドの発信源とするに足るほど吟遊楽人が家中と密接に結びついていたのかどうか疑わしい、とかなり懐疑的な見方をしている。¹²⁾

ドブソンとテイラーによれば、この緑林の伝説は一四世紀後半のベスト襲来後、経済的進展を遂げた多くのイングランド人が一四〇〇年前後に抱いた社会的野心のあらわれとみなすことができるし、またそうすべきなのである。「ロビン・フッドは新たな社会集団であるイングランドのヨーマン層の、新しいタイプのヒーローであった」¹³⁾。一五世紀のは

はじめにはロビン・フッド崇拜は社会のあらゆる階層に浸透していた。その頃には、その起源がホールであれ、市場であれ、「ジェントリ」であれ、「農民」であれ、ロビン・フッドはすでに万人のヒーローになっていた。こう述べて、ドブソンとテイラーは一五世紀においてロビン伝説がひろく民衆の間で人気を博していた点を強調する。¹⁴⁾

ところで、ロビン・フッドは実在したのであろうか。

上述のように、ホウルトは実在のロビン・フッドの候補者として、一二二五年の裁判記録に登場する「逃亡者」ロビン・フッドを挙げているが、それ以上に深入りはしていない。そして、「ロビンフッド」という洗礼名と姓の組合せがきわめてまれである点に着目し、この特異な姓の出現の背後にロビン・フッド伝説の存在を想定している。

これに関連し、一九八四年にデイヴィッド・クルック博士は今日知られているロビンフッド姓でもっとも古い事例を発見した。一二六二年の財務府の「覚書記録簿」にみられるウイリアム・ロウプフッドがそれである。¹⁵⁾ 従来、一三七七〜九年頃に書かれたラングランドの『農夫ピアズ』がロビン・フッドへの最初の言及であるとされてきたが、今や一二六二年であることが明らかになった。ここから、ロビン・フッドは一二六二年にはすでに伝説化され、広く知られていたものと推定される。このクルックの発見によって、伝説の起源を一三世紀とみるホウルトの説は補強されることになった。

その後、クルック博士は当時の州長官をユースタス・オヴ・ラウダムと同定し、実在のロビン・フッドを探し求める。¹⁶⁾ 一二二五年七月ヨークシャの州長官ユースタス・オヴ・ラウダムは国王令状により、「わが領地のアウトローにして悪人であるロバート・オヴ・ウエザビを捜査・逮捕・絞首するために」(ad Robertum de Weryby utlagatum et malefactorem terre nostre querendum et capiendum et decipiendum.)¹⁷⁾ 雇った下役の経費として、四〇シリングの出費を認められた。それから四ヶ月後の十一月、財務府にやってきたユースタスは、さらに「ロバート・オヴ・ウエザビを吊るすための鎖代として二シリング」(Et pro j. cathena ad suspendendum Robertum de Weryby ij s.)¹⁸⁾ を請求した。翌一二二六年の会計記録から、

ロバート捜索の過程でさらに二八シリングを要したこと、また、下役の長は葡萄酒業者のウイリアムと呼ばれていた男であったことが判明する。

ロバート・オヴ・ウエザビを逮捕するために州長官によって特別の下役グループが雇われていることは、この人物が決して普通の犯罪者ではなかったことを意味している。つまり、ロバート・オヴ・ウエザビは通常の殺人犯ないしは強盗犯の上をゆく人物であった。また、彼を「吊るす」ために購入された鎖についての言及から、彼が実際に裁判にかけられたこと、そしておそらく彼の身体は鎖で吊るされ、見せしめとして、公衆の面前にさらされたことが推測される。⁽¹⁹⁾

こうして、デイヴィッド・クルックは、既述の二二二五年の巡回裁判に登場する逃亡者ロバート・フッドはヨークシャのアウトローにして悪人のロバート・オヴ・ウイザビと同一人物ではないかと推測するのである。もともとクルックみずから認めているように、両者が同一人物であったことは考えられるが、史料制約もあり、それを立証することは不可能なのである。確かなことは、「この二人の男がごくありふれた同じ名前（ロバート）をもち、ひじょうに広大な同じ州（ヨークシャ）において、ほぼ時期を同じくして（二二二五年頃）法に抵触した⁽²⁰⁾」（カッコ内、筆者）ということである。

二、庶子封建制と「ジェントリー・ギャング」

ホウルトの唱える一三世紀起源説に対して、一四世紀起源説を説いたのがジョン・マディコットである。『武勲』は一三世紀というよりは一四世紀初期のテーマと言語を反映しているとみるマディコットの見解は、ホウルト説に対する最初の本格的な反論であり、その意味でも看過できない。それゆえ、ここではマディコット説の論点を『武勲』の内容

と照らし合わせながら、整理しておこう。

マディコットは『武勳』の社会経済的内容を検討し、『武勳』は「庶子封建制の言葉で語られており、一三世紀というよりは、むしろ一四世紀の言葉である」⁽²⁾との結論に達した。なによりも、『武勳』に描かれているお仕着せと給金は一四世紀初期の特徴を示しているという。

事実、お仕着せと給金については『武勳』のなかでは頻繁に言及されている。たとえば、『武勳』第一〇七連では、土地を召し上げようとする修道院長を前に、助けを求める騎士に対して、国王裁判官は次のように述べている。⁽²⁾

「わしは修道院長に雇われの身」
と裁判官
「I am holde with the abbot,' sayd
the iustyce,

「衣服と給金の両方で」
'Both with cloth and fee':

(第一〇七連)

ここには国王の首席裁判官がヨークの聖マリア修道院の院長に「衣服と給金」で抱え込まれている様子が如実に示されている。こうした悪弊は一二三〇年代に既に知られていたが、とくに広く知れ渡ったのは一四世紀の前半である。後述するように、第一五〇連では、弓の試合でリトル・ジョンの腕を見込んだノッティンガムの州長官が、リトル・ジョンを年給二〇マルクで雇おうと申し出ている。これも一四世紀前半に典型的にみられた給金にもとづく抱え込みである。『武勳』のなかで、リトル・ジョンは州長官の料理人に対して、ロビン・フッドが年に二度衣服を新調させ、二〇マルクの給金を与えることを約束している。即ち、

「弓の腕も確かならう」
'Cowdest thou shote as well in a bowe,

わしと緑の森に来て
To grene wode thou shuldest with me,

年に二度 お前の服を
And two times in the yere thy clothinge

新調させてはどうか

Changed shulde be ;

(第一七〇連)

「毎年ロビン・フッド様から

‘And every yere of Robyn Hode

二〇マルクの手当てをもらえぬぞ」

Twenty merke to thy fe.’

「剣をおさめる」と料理人

‘Put up thy swerde,’ saide the coke,

「仲間になろうではないか」

‘And felowes woll we be.’

(第一七一連)

森のなかにいるロビン・フッドとその一味は緋色と縞のお揃いの上着を身に着けている。

誰もが緋色と縞の

And everych of them a good mantell

上等なマントをまとい

Of scarlet and of raye ;

善良なロビンの話を

All they came to good Robyn,

聞きに来た

To wyte what he wolde say.

(第一三〇連)

また、ロビンみずから王とその供の者にリンカン・グリーンのお仕着せを分け与える。

そこで王は僧衣を脱ぎ捨て

The kynge kest of his cole then,

緑の衣を身につけた

A grene garment he dyde on,

騎士も皆 すぐさま

And every knyght had so i wys.

緑の衣を身につけた

Another had full some.

(第四二一連)

リンカン・グリーンに衣に着替えると

When they were clothed in Lyncolne grene,

かれらは灰色の衣を脱ぎすてた

They keste away theyr graye,

「よあ ノッティンガムに出発だ」

‘Now we shall to Notyngham,’

われらの王は口を切った

All thus our kynge gan say,

(第四二二連)

ロビンは王の宮廷にいる間に、かれの仲間や騎士、郷士のために過分な金銭を与えてしまふ。

ロビンは王の宮廷に

Had Robyn dwelled in the kynges court

僅か一二と三ヶ月とどまったが

But twelve monethes and thre,

百ポンドと手下の者への給金も

That he had spent an hondred pounde,

すっかり使い果たして 無一文

And all his menes fe.

(第四三三連)

ロビン様 どこへ行っても

In every place where Robyn came

騎士や郷士のため

Ever more he layde downe,

金を使ったそのせいで

Both for knyghtes and for squyres,

かれの名声 高まった

To gete hym grete renowne.

(第四三四連)

こうした庶子封建制に特徴的な用語をもちいた引用は、「一四世紀という」とめどないお仕着せの「世紀」⁽²⁴⁾の聴衆にとつては、それより以前の聴衆よりもより一層理解できるものであったとマデイコットは主張する。⁽²⁴⁾

ホウルトが一三世紀に特徴的なものだとしている他の要素、たとえば騎士強制、不正をはたらく州長官、フォレスト

業務なども、同じように一四世紀にあてはまるとマデイコットは述べ、次のようにホウルトの所説を批判する。

第一に、『武勳』第四五連にみられる騎士強制への言及について。すなわち、ロビン・フッドが騎士に対して、汝は「無理やり騎士にされたのか／はたまたヨーマン出身の騎士なのか」と尋ねるくだりである。この文言から、ロビン伝説の起源をヘンリ三世ないしはエドワード一世の時代に想定するには及ばない。騎士強制の慣行はリチャード二世治世（一二七二〜九九）初期まで、かなり頻繁におこなわれていた。『武勳』にみられる騎士強制への言及は、一三世紀と同じように、一四世紀にもあてはまるのである。⁽²⁵⁾

第二に、初期のバラッドのほとんどすべてにおいて、州長官は悪役とされている。このことは州長官の地方行政に対する攻撃が最もはげしかった一三世紀の状況を反映していると主張されてきた。だが、州長官が嫌われていたのは、なにも一三世紀に限らなかつた。州長官への反感は中世全体を通じてみられたのである。⁽²⁶⁾

第三に、バラッド群に治安判事が登場していない事実は、ロビン・フッドの起源が一三世紀にあることを裏づけるものであるといわれてきた。だが、州長官に比べれば、治安判事は一四世紀最後の四半世紀まで目立った存在ではなかつたし、かれらに対する不満もあまり聞かれなかつた。それゆえ、そもそも一四世紀のロビン・フッド・バラッド群に治安判事が割り込んでくるのを期待してはならないのである。⁽²⁷⁾

最後に、バラッドにみられるフォレストの重要性は、必ずしも一三世紀起源説を支持するものではない。なるほど、一三〇六年のフォレスト勅令によってさまざまな譲歩がなされて以降、フォレストは前世紀のように主要な政治問題とはならなかつた。しかし、フォレスト裁判権の圧政的な行使に対する不平不満は依然として頻発していたし、フォレスト巡回裁判も継続されており、地元民にとっては大きな経済的損失を伴った。一三三五年のシャーウッド・フォレストの巡回裁判は、罰金の膨大なりストを生み出した。一四世紀のバラッド群がその背景にフォレストをもっていたとしても、驚くには値しないのである。⁽²⁸⁾

こうして、マディコットは『武勳』その他の初期のバラッド群には、確信をもってその起源を一三世紀に求めることができるような要素はなにもないとし、ロビン・フッド伝説の誕生時期を一四世紀初期とみている。⁽²⁹⁾

『武勳』に登場する三人の主要人物については、そのおののに該当する実在の人物を同定し、一四世紀初期に金貸しをおこなっていた強欲な聖マリア修道院長トマス・ド・マルトン、修道院長に抱え込まれ、職権濫用で評判の悪かった国王の首席裁判官ジェフリ・ル・スクループ、それに犯罪者としてアウトローの宣告をも受けたノッティンガムの州長官ジョン・ド・オクセンフォードを挙げている。これらの人物はすべて一三三〇年代に活躍したのである。⁽³⁰⁾

また、マディコットはフォルヴィル家とコウテレル家といういわゆる二大「ジェントリー・ギャング」にも注目する。これらのギャングが悪事をはたらいていた絶頂期も、一三三〇年代後半から三〇年代前半にかけての時期なのである。これらの行動は民衆の共感を呼び、とりわけフォルヴィル家は民衆のヒーローとして、ロビン・フッドとその一味に類似した存在であるとマディコットはみる。⁽³¹⁾

さらに、『武勳』は抵抗文学のジャンルにうまく当てはまるといえる。たとえば、一三三八〜九年の「国王の税に反対する歌」*The Song against the King's Taxes* は暴利をむさぼる税の徴収人に対する不満を訴えている。また、国王の食糧徴発官とベイリフを公然と非難している「農民の歌」*The Song of the Husbandman* も同時期、すなわち一四世紀前半に書かれたものと推定される。こうして、マディコットはロビン・フッドのバラッド群は圧政的な状況の下、犯罪と無秩序が横行した一三三〇年代に誕生したと推察するのである。⁽³²⁾

マディコットと同様、ロビン・フッドの起源を一四世紀にみるのは、ジョン・ベラミである。ベラミは、ロビンはジェントルマンの出自で、王侯貴族に仕えていた可能性が高いとし、『武勳』に登場する「我らがみめよい国王」(our comly kyng) はエドワード二世であると推定した。しかしながら、ベラミはマディコットが同定した州長官や聖マリア修道院、首席裁判官については、いずれも説得力に欠けるとして批判的である。⁽³³⁾ また、コウテレル家、フォルヴィル

家、あるいはスタッフォード家といった盗賊団の中核を形成していたのは農民ではなく、それより一段上の階級であった。それゆえ、当時の盗賊団は民衆のヒーローにはなれなかったであろうと述べ、この点でもマディコットとは見解を異にしている。

中世イングランドにおける文化的波及の諸相について考察したピーター・コスは、『武勳』が描き出そうとした理想的な世界は、一三八一年にマイル・エンドやスミスフィールドにおいて農民たちが構想した世界とさほどかけ離れたものではなかったという。それは腐敗した行政官や聖職者から解放された自由な民の国家であった。そこではだれもが森の獣や水鳥たちに自由に接近することができ、社会的地位の差異もあまりなく、国王は人びとの自由を危うくさせない限りにおいて、主君として認められている。コスは、『武勳』は一四世紀後期の社会的危機を内包しているとして、ある種の政治的抵抗に関心を抱いていた人びとを聴衆として想定している。⁽³⁴⁾これはある意味で、ヒルトン説の見直しといつてよい。⁽³⁶⁾

ロビン・フッドは宮仕えをする際、重要な条件を付している。即ち、

「しかし宮仕えがいやになったその時は *But me lyke well your servyse,*

直ちにここに舞い戻り *I wyll come agayne full soone,*

茶色の鹿を弓で射ながら *And shote at the donne dere,*

これまで通りに暮らします *As I am wonte to done.*」

(第四一七連)

コリン・リッチモンドが述べているように、自立したロビン・フッドは自分以外のだれにも従属することがない。右に挙げた『武勳』第四一七連にみられるように、ロビンにとっては宮仕えさえも、森の自由にとって代わるものではなかった⁽³⁷⁾のである。まことに、ロビンにとっての森は、自分自身のあるべき本来の姿、即ち、自己のアイデンティティを

確認する場なのである。

三、一四世紀の犯罪とロビン・フッド伝説

前述したマディコットやベラミとは異なる問題視角からロビン・フッド伝説に切り込んだのがバーバラ・ハナワルトである。ハナワルトは一四世紀初期のロビン・フッド・バラッド群と一四世紀における三つの州（ノーフォーク、ノーサンプトンシャー、ヨークシャー）の未決囚釈放巡回裁判記録に残されている犯罪記録を比較しながら、ロビン・フッド・バラッド群を当時の社会的文脈のなかでとらえようとした。その論点を整理すれば、次のようになる。

第一に、ロビン・フッドのバラッドでは、中心的な登場人物はロビン・フッド、リトル・ジョン、粉屋のマッチ、それにウィル・スカロックで、かれらが盗賊団の中核を形成している。多くの場合、ロビン・フッドとリトル・ジョンの二人きりで出発するが、実際の強盗も少人数から構成されており、追い剥ぎができるほどの柔軟性があった。裁判記録のなかで圧倒的に多いのが二名から成るグループで（四一％）、次いで三名（二二％）、そして四名の集団（一二％）であった。⁽³⁸⁾

第二に、ロビンはより大きな集団を必要とした時には、角笛を吹いて、緑の森から一四〇名の手下を招集することができた（第三八九連）。実際の強盗団も、場合によっては五名から二〇名ないしはそれ以上のメンバーを集めることができた（強盗団の二五％）。じゅうぶんに武装した盗賊団が市場を略奪・接収するとなると、小規模な軍隊なみの集団が必要とされた。⁽³⁹⁾

第三に、ロビン・フッドのバラッドでは、ロビン・フッドとその陽気な男たち（Robin Hood and his merry men）と

たわれており、女性はそのなかに含まれていない。親族や聖職者もしかりである。しかし、実際の強盗には女性、親族、聖職者も含まれていた。未決囚釈放巡回裁判諸記録では強盗団の一二％で女性が審理されているが、強盗団のメンバーのなかで女性の占める割合はわずか五％にすぎなかった。また、調査対象となった全強盗団のうち二一％に親族が含まれていた。聖職者は全強盗団の一三％に認められ、構成メンバーの七％を占めていた。暴力的な犯罪において聖職者の関与する割合が高いのは、ひとつにはいわゆる「聖職者特権」によって絞首刑を免れたという事情があったことが考えられる。⁽⁴⁾

第四に、アウトロー集団にとって決定的に重要なのは、抜きんでたリーダーの存在であった。ロビン・フッドは最強であったためか、一番の射手であったせいか、あるいは生来のリーダーであったか、もしくはグループのなかで社会的地位が一番高かったためか、ともかく尊敬をあつめていた。ロビン・フッド・バラッド群はリーダーシップに必要なロビンの資格について、明確なことは述べていない。唯一の手がかりは数多くみられる弓の試合である。実際の強盗は伝統的な社会的階梯組織に敬意を払い、騎士がメンバーのなかにいれば、その者がリーダーになった。家族が強盗の中核を形成している場合は、父親が長男がリーダーとなった。⁽⁴⁾

第五に、実際の強盗団の首領は、バラッドにみるロビン・フッドとよく似た地位にあつたし、組織の構造もバラッドに描かれているロビン一味のそれに類似している。ロビンの手下は、ロビンを「お頭かしら」と呼び、ロビンは職務の一部を腹心の部下であるリトル・ジョン、粉屋のマッチ、それにウイル・スカロックに任せている。こうした組織の上下関係は、実際のアウトロー集団を反映している。つまり、ロビンとその一味は軍隊組織に似かよっているのである。このような組織のなかで、リトル・ジョンは副指揮官の地位にあつた。⁽⁴⁾

さらに、バラッドのアウトロー集団も実際の強盗もともに、王や貴族の家中を模倣しており、揃いのお仕着せを着用していた。貴族の家臣たちと同様、ロビン・フッド一味は全員がリンカン・グリーンのお仕着せを身に着けていた。王

もロビンのお仕着せに身を包んだことは、上述した通りである。ロビンは手下から尊敬をあつめていたが、王の目にはそれがうらやましくすら映った（第三九一連）。実際の強盗は貴族の家中でしばしば殺し屋として雇われたので、上下関係にはよくなじんでいた。⁽⁴³⁾

バラッドの盗賊と実際の強盗とのもつとも大きな違いは被害者の選択にあった。『武勲』の冒頭部分の有名な箇所では、ロビン・フッドは危害を加える者とそうでない者を区別している。農夫、ヨーマン、善良な騎士、郷士には手は出さず（第二三〇一四連）、司教や大司教、それにノッティンガムの悪代官が攻撃的になっている（第一五連）。また、ロビンは婦人には危害を加えなかった（第一〇連）⁽⁴⁴⁾。

しかし、実際の犯罪では、農民、商人、役人、聖職者のもとより、村の職工や牧羊夫、婦人も子供も犠牲になった。婦人や子供が犠牲になったのは、家にいることが多かったためであろうとハナワルトは推測している。基本的に、実際の強盗は誰とはいわず標的にし、盗みをはたらいたのである。⁽⁴⁵⁾

盗品についていえば、ロビンとその一味は、金銭以外では、たとえば立派な馬、貴重な皿、衣類といった高価な物品に限定して盗みをはたらいた。一方、実際の強盗も高価な品物を盗んだが、それだけではなく、日用品や衣類、食料、料理道具といったごく普通の日常生活に必要な物も盗んだ。また、実際の強盗は農民ばかりでなく、貴族、聖職者からも物品を強奪した。民衆はバターやパンといった日常必需品をもっていたがゆえに、強盗にとってはより好ましい標的となったのである。⁽⁴⁶⁾

一四世紀に実在した強盗とロビン・フッド・バラッド群にみられるそれとの間には相違点も認められるが、ハナワルト女史は「全体としてみれば、実際の強盗団は構成員、報酬、強盗の手口の点で、バラッドの盗賊団に酷似している」と結論づけている。⁽⁴⁷⁾

ロビン一味がアウトロー集団であること、当該集団が位階制的な社会構造を示唆していることから、ロビン・フッド

伝説が中世後期イングランド社会の組織化された強盗団を反映していることはあきらかであろう。バーバラ・ハナワルトはこのように述べて、ロビン・フッド伝説の歴史的起源を一四世紀にみている。

四、弓術と長弓

『武勲』では、長弓を用いた弓術が随所に登場する。

長弓が最初に使用されているのは第三節で、レイノルド・グリーンリーフ（リトル・ジョンの変名）が弓の試合に出場し、州長官（代官）がその腕を見込んで、自分の家来にならないかと誘う場面である（第一四五〜一五〇連⁽⁴⁸⁾）。

うらかなある日のこと

It was upon a mery day

若者らは弓の試合を思いたつ

That yonge men wolde go shete;

リトル・ジョン　すぐに弓を取り

Lytell John fet his bowe anone,

相手になろうと申し出た

And sayde he wolde them mete.

（第一四五連）

三度リトル・ジョンは矢を放ち

Thre tymes Liell John shet aboute,

毎回のの小枝に当て、縦に裂く

And alwey he slet the wande,

高慢なノッティンガムの代官が

The proude sherif of Notingham

的のそばに立っていた

By the markes can stande.

（第一四六連）

代官はかたく誓ってこう言った

The sheriff swore a full greater othe,

「十字架で死んだ御仁にかけて

'By hyrn that dyede on a tre,

この男 わしが今まで見た中で

This man is the best arschiere

一番の腕の立つ射手だ

That ever yet sa we.

(第一四七連)

「なあ、レイノルド・グリーンリーフ

'Sey me, Reynaud Grenlefe,

わしと一緒に暮らす気はないか

Wolde thou dwell with me?

そしたら 毎年二〇マルクを

And every yere I woll the gyve

お前に手当としてやるぞ」

Twenty marke to thy fee.'

(第一五〇連)

既述のように、ここには給金による抱え込みが明瞭にみとれる。

また、『武勲』第五節ではロビン・フッドを捕まえようと、ノッティンガムの州長官が弓試合を企画・開催する(第二八二〜二八五連)。その試合にロビンとその一味も参加し、勝利を収める(第二八九〜二九五連)。賞品は立派な弓矢で、一番の腕ききであるロビンに贈られる(第二九四〜二九五連)⁽¹⁷⁾。

かれらがノッティンガムに来た時に

When they came to Notyngham,

的ははるか遠くにあつた

The butes were fayre and longe ;

ほとんどが頑丈な弓を引く

Many was the bold archere

大胆不敵な射手ばかり

That shoted with bowes stronge.

(第二八九連)

四人目のアウトローが弓を引く
それがロビン・フッド御当人
それを的の側に立っていた
尊大な代官がじっと見ていた

(第二九一連)

かれらが弓を射った時
立派で善良な射手のうち
いつも一番の腕さきは
やはりロビン・フッドその人だった

(第二九四連)

ロビンに立派な弓矢が手渡された
一番それにふさわしかったから
うやうやしく贈り物を受け取って
かれは緑の森へと行きかけた

(第二九五連)

The fourth outlawe his bowe gan bende.

And that was Robyn Hode,

And that behelde the proud sheryfe,

All by the but he stode.

When they had shot aboute,

These archours fayre and good,

Evermore was the best,

For soth, Robyn Hode.

Hym was delyvered the good arrowe,

For best worthy was he ;

He toke the yeft so curteysly,

To grene wode wolde he.

『武勳』第四〇二〜四〇三連では、ロビン・フッド、リトル・ジョン、ウイル・スカロック、それに国王が参加する弓試合が描かれている。驚くべきことに、この試合では、ロビンは「指三本かそれ以上」(第四〇三連)花輪の的をはずしてしまふ。修道士に変装した国王はロビンに罰として一撃をくらわせ(第四〇八連)、それがもとでロビンは修道士の正体が国王であることに気づく(第四一〇〜四一一連)。その後、国王から赦しを得たロビンとその一味は宮廷に

招かれ、宮仕えをすることになる（第四一三～四一六連⁽⁵⁰⁾）。

『ロビン・フッドと陶工』*Robin Hood and the Potter* では、弓試合はバラッドの中心的なできごとになっているのみならず、もっとも重要な象徴ともなっている。このバラッドでは、陶工に変装したロビンがノッティンガムの州長官の手下二人と弓の試合をおこない、勝利して四〇シリングの賞金を勝ち取る（第四二～五四連⁽⁵¹⁾）。

矢筒のところにはロビンは行つて

To a quequer Robin went,

立派な矢を一本取つた

A god bolt owthe he toke ;

そこでの近くに進み

So ney on to the marke he went,

一フィートもはずさなかつた

He ffayled not a fothre.

（第五一連）

代官の手下もロビンも

All they schot abowthe agen,

みな また順繰りに射つた

The screefes men and he ;

ロビンは的をはずさず

Off the marke he weldre not ffayle,

的は三つに飛び散つた

He cleffed the preke on thre.

（第五二連）

ロビンは弓の試合において、すぐれた射手として自身の武勇を披露している。弓の試合は州長官をかつぐ契機として設定されており、それによつて最終的にはアウトローの秩序が回復されることになる。⁽⁵²⁾

ケリ・ドウフリースによれば、このような弓の試合は農民のゲームではない。農民にはこの種の余暇活動に費やす時間もなければ、その技能もなかつたものと推測される。農民が弓を使うのはおもに狩猟のためであった。⁽⁵³⁾

長弓が上流階級やヨーマンと結びつけて考えられるようになるのは、一四世紀になってからのことであるが、この点⁽⁵⁴⁾

は重要である。というのも、ホウルトはロビン・フッド伝説の起源を確定するにあたり、弓術は重要な指針とはならないことを強調しているからである。⁽⁵⁶⁾ ドウフリースは、初期のロビン・フッド伝説に關していえば、ヨーマンである弓の射手によって長弓が使用されているところから、その起源を一四世紀もしくは一五世紀初期と推定している。⁽⁵⁷⁾

これに關連して注目されるのは、アンドリユー・エイトンの研究である。エイトンは、一三三八年一月二日、ワイト島の守備隊に加わった四三名の弓の射手の給与支払い名簿のなかに「ロビン・フッド」(Robin Hood)の名前を發見した。この「ロビン・フッド」の歴史的重要性について、エイトンは次のように説明する。

一三世紀および一四世紀の諸記録にみられるほとんどすべてのロビン・フッドは、どれひとつとして *Robin Hood* とは記されておらず、*Robert Hood* と記されている。この事実を考慮すると、一三三八〜九九年にワイト島守備隊の弓の射手のなかに緑林のヒーローの名前が含まれていることは、注目に値する。⁽⁵⁷⁾ パイプ・ロウルズに「逃亡者」*fugitivus* と記されている人物がオリジナルなロビン・フッドの候補者であるというホウルトの主張は、既述のように、デイヴィッド・クルック博士によって一層強化された。

しかし、複数存在する *Robert Hood* のうち、どのロバート・フッドがかの有名なアウトローと結びつくのか、決定的な証拠はまったくない。ロバート・フッドという名前は、あまりにもありふれたものであるがゆえに、確信をもって緑林のアウトローと結びつけることができないのである。それに対して、ラテン語の文書では決して一般的ではない *Robin Hood* の名をもったワイト島の弓の射手は、伝説のアウトローと結びついているにちがいないとエイトンは推察する。⁽⁵⁸⁾

また、ホウルトが言うように、弓兵が一三世紀の戦争において一定の役割を果たしていたことは否定できないが、国王軍隊において定期的に大勢の弓兵が雇用されるようになるには、一三世紀末のエドワード一世治世期(一二七二〜一三〇七)まで待たなければならない。さらに、一団となった弓隊が綿密に計画された戦術上の体制に組み込まれるの

は、エドワード三世の治世になってからのことなのである。エドワード三世がスコットランドおよびフランスで対外戦争をおこなった時期は、弓兵がイングランドの軍隊組織のなかで不可欠な要素となった時期でもあった。「ロビン・フッド」と呼ばれる弓の射手が兵員記録簿に記載されていることは、弓術が一三四〇年頃にはすでにロビン・フッド伝説の注目すべき特徴になっていたことを明瞭に物語っている⁽²⁰⁾。

百年戦争で戦った騎馬の弓兵はエドワード一世治世期の弓者よりも装備も俸給も良く、軍事的にも有効性を発揮した。これらの弓兵は比較的裕福な社会的出自のものが多かった。換言すれば、かれらの多くがヨーマンの家柄だったのである。まさに「よきヨーマン」のたぐいで、エイトンによれば、ロビン・フッド・バラッドで称賛されており、バラッドの聴衆を構成したのはこうしたヨーマンなのであった⁽²¹⁾。

一三三八〜三九九年に守備隊としてワイト島に駐屯していた「ロビン・フッド」は、弓の射手として軍務につき、戦争が中断したときに緑の森に暮らし、あらたに軍務の機会が生じたときには、再び軍務に戻った。そのような男ではなかったか、とエイトンは推測する⁽²²⁾。

さらにエイトンは犯罪者となるケースが多かった退役軍人とロビン・フッド一味の生活様式が酷似していることに注目する。ロビンは明らかにみずからすすんで一般社会の外で暮らしている。ロビンとその仲間たちは、結婚しておらず、緊密な家族の絆もない。また、財産も所有していない。かれらは不屈の精神を持ち、野外生活にも慣れていた。初期のロビン・フッド・バラッド群に描かれているのは、こうした退役軍人たちの独特な生活様式なのである。加えて、ロビン一味は王侯貴族の家中で常勤スタッフとして奉仕することを好まない。騎士の従者として短期契約で軍務についていた者たちにとっても、むしろその方が自然なことであつたらうと述べ、この点でもエイトンは退役軍人とロビン一味の生活様式の類似性を強調する⁽²³⁾。

ロビン・フッド・バラッド群には、中世後期の長期にわたる戦争経験が色濃く影を落としており、それによって特徴

(21) ロビン・フッド研究の一動向

づけられていることは明白である。帰還兵の大量流入によって、アウトローの共同体そのものの性格が変化した。帰還兵の多彩な活動が、一般人の抱くアウトロー集団のイメージに大きな影響を与えた。ロビン・フッドとその仲間たちは物語のなかで退役軍人のように外見を装い、退役軍人のような行動をとりはじめたのである。⁽⁶³⁾

活動的な軍隊生活に慣れてきた者にとって、ロビン・フッド物語は実に面白い娯楽を提供したのであろう。そのような軍人たちは「よきヨーマン」を擁護し、弓術の技能がきわだっている物語に容易に共感を覚えたにちがいない。⁽⁶⁴⁾このように述べて、エイトンはロビン・フッド伝説のもつ軍事的側面を重視している。

実在したアウトローの多くが実際に百年戦争を経験していた事実を考慮すると、対外戦争がロビン・フッド伝説の形成に及ぼした影響を重視するエイトンの見解は示唆に富む。また、オリジナルなロビン・フッドや弓の問題について、ホウルトやクルックの説を批判的に検証している点も見逃がせない。

五、ギルドと都市民

近年、『武勲』では土地の利害はほんのわずかしか役割を果たしていないとの批評もあるなかで、これまでの農村社会を背景にした見方とは異なり、都市を背景としてロビン・フッド・バラッドを読み解くのがトマス・オルグレンである。⁽⁶⁶⁾

オルグレンはロビン・フッド・バラッドを都市の文脈でとらえなおしたりチャード・ターデイフや、一四世紀及び一五世紀において冒険の騎士的理念が商人的理念へと変化したとするマイケル・ナーリッチの研究によりながら、ロビン・フッドの商人的性格を強調する。『武勲』が編纂されたのは一五世紀半ばであるが、そこで描かれている時代は約

一世紀前のエドワード三世治世で、より具体的にいえば、一三三〇年代および一三四〇年代であるとみる。⁽⁶⁹⁾ オルグレンによれば、ロビン・フッド・バラッドの「生産者にして消費者」は都市の商人階級なのであった。⁽⁷⁰⁾

よく知られているように、ヨーマンに属するロビン・フッドは騎士の行動や立ち居振る舞いを模倣している。たとえば、既述のように、ロビンが自分の仲間に加わった者にお仕着せを支給し（第二三〇連）、給金を与えているのはその典型といえる（第一七一連）。また、ロビンは「礼節にかなった」行動をとる。「見知らぬ客」が来るまでは、食事をとらず、食事の前には手を洗い、拭く。騎士に遭遇する場面では、次のような所作をする。

かれが小屋に案内されてくると
They brought hym to the lodge dore ;

ロビンはかれを見るなり
When Robyn hym gan see,

じつに礼儀正しく頭巾をとり
Full curtesly dyd of his hode,

跪いておじぎをした
And sette hym on his knee.

（第一九連）

ロビンは自分よりも社会的上位者に出会ったときは、頭巾をとって、うやうやしくおじぎをし、敬意を表している。このように、アウトローでありながら、礼節にかなったロビンの行動は、『武勲』の大きな特色となっている。⁽⁷¹⁾

ロビン・フッドは、こうした宮廷人としての徳目をかねそなえているが、それと同時にギルド構成員ないしは商人のものも商業的な徳目をも具現している。オルグレンはギルドの慣行や商人の活動と『武勲』の類似点に注目する。こうした観点からロビン・フッド伝説を具体的に読み解いたのは、管見の限りでは、オルグレンが最初である。「森の世界にはすでに都市市場の諸価値が浸透していた」⁽⁷²⁾のである。

以下、オルグレンに拠りながら、ギルドの慣行や商人の視点から『武勲』を読み解いてみよう。

(i) ギルドのパトロン

ギルドはパトロンとなる聖人を選んだが、聖母マリアは四大リヴァリ・カムパニー反物商、反物職工、高級織物商、皮革商―のパトロンである。『武勳』のなかでアウトロー―味は神や他の聖人に誓いをたてるが、聖母マリアを仲裁者ならびに保護者として選んでいる。また、ロビンは毎日食事前にはミサをおこない、聖母マリアを他のだれよりも敬愛していた。⁽²⁴⁾

当時 ロビンにはよい習慣があり
A gode maner than had Robyn ;
どこの土地にいようと
In londe where that he were,

毎日食事をするまえに
Euery day or he wold dyne

三度のミサにあずかった
Thre messis wold he here :

(第八連)

一つは父なる神への礼拝で
The one in the worship of the Fader,

もう一つは聖霊のため
And another of the Holy Ghost,

三番目はもとも敬愛する
The thirde of Our dere Lady

われらが聖母のためだった
That he loved alther moste.

(第九連)

(ii) ギルドの組織

ギルドの主要な役員は「マスター」masterあるいは「ウォードン」wardenと呼ばれ、その組織は自由人から成る兄

弟団ないしは仲間であった。反物商の同業組合は一名のマスター、四名のウォードン、それに三〇名のアシスタントによって管理されていた。かれらが二三〇〜一八〇名のお仕着せを支給されたギルド構成員のみならず、「反物の外に」(outside the cloth) いる人びと、すなわち職人、奉公人、徒弟の諸活動を仕切っていた。

『武勲』のなかで、ロビンは「お頭」maisterと六回呼ばれている。他方、ロビンの側近ともいえるリトル・ジョン、ウィル・スカロツク、粉屋の息子マツチは、「兄弟」brethernと二回、あるいは「輩」^{ともから}fellowsと二回呼ばれており、ロビン一味の組織全体が「一団・仲間」company / meyneと九回呼ばれている。一団は一四〇名の屈強なヨーマンから構成されており、いざという時は、ロビンのものにはせ参じる。オルグレンによれば、この一四〇名という数はお仕着せを着用したギルドの成員数と符合する。

ギルドは国王から特許状を付与され、さまざまな独占を許されている限りにおいて、親国王派の立場をとっていた。『武勲』第三八六連にも国王への追従を示す台詞がみられる。「この世で私の一番敬愛する／お方は国王陛下」というのが、それである。

ギルド加入候補者は技術ないしは技能を身につけていなければならなかったほか、ギルド加入のための登録料を支払い、通常七〜一〇年に及ぶ徒弟修業期間を経なければならなかった。ひとたび加入が認められると、独自のお仕着せを支給された。⁽²⁴⁾

(iii) 新メンバーの加入

新メンバーへの加入は、『武勲』のなかでリトル・ジョンが州長官の料理人と激しく戦い、引き分けに終わってからおこなわれる。料理人は特別な技能、すなわち剣士としての技能を發揮し、リトル・ジョンによってアウトローの一味に加えられる。リトル・ジョンは料理人にお仕着せと給金を与えることを申し出る(第一七〇〜一七一連)。

もうひとつの例は、ヨーマン・アーチャーであるレイノルド・グリーンリーフに変装したリトル・ジョンが州長官と弓の試合をおこなった後、州長官に見込まれ、新規参入をすすめられた時の場面にみてとれる。リトル・ジョンは州長官から年給二〇マルクの手当てを提示された際（第一五〇連）、まずもって自分の主君である騎士サー・リチャード・アット・ザ・リーから許可を得なければならぬと返答する（第一五一連）。許可を得なければ、徒弟契約に関する民事法と、他人から徒弟修業の誘いを受けることを禁じているギルド規約の双方にそむくことになるのである。⁽²⁶⁾

(iv) 徒弟修業

リトル・ジョンがまんまと州長官を森に誘い込むと、州長官は着ていた衣服を脱がされ、緑のマントを支給される（第一九四連）。その後、ロビンは州長官にこれから一年間自分たちと生活をともにし、その間に州長官にアウトローになるすべを伝授しようと申し出る（第一九七〜一九九連）。

「*gouge*」とロビン・フッド

‘Make glade here,’ saybe Robyn Hode,

「代官殿 元気を出して」

‘Sherif, for charite!

これが まこと 緑の森の

For this is our ordre i wys,

わしらのしきたりで」

Under the grene wode tree.’

(第一九七連)

「これからまる一二ヶ月は」とロビン

‘All this twelve monthes,’ sayde Robin,

「わしと一緒に暮らすがい

‘Thou shalt dwell with me;

わしがお前を、よいか代官

I shall the teché, proude sherif,

一人前のアウトローに仕込んでやるぞ」

An outlawe for to be.’

(第一九九連)

ロビンの「わしらのしきたり」(一九七連) やまる一年間の修業期間は、親方と徒弟に関するギルドの慣行と相通するものがある。親方は徒弟に一定期間、部屋、食事、衣服を支給する約束をする(一九九連)。

他方、徒弟は三〇三ポンド(リトル・ジョンが州長官から奪い取った額)を登録料として納め(二七九連)、自分の親方に危害を加えないことを誓う(二〇二連)⁽²⁷⁾。

「あの尊大な代官からよろしくと」

‘Well the greith the proude sheryf,

私があずかってきたものは

And sende the here by me

彼の料理人 銀の皿

His coke and his silver vessel,

それに三〇〇と三ポンドです」

And thre hundred pounde and thre.’

(第一七九連)

(v) お仕着せの授与

『武勳』ではお仕着せの授受が中心的な役割を演じており、アウトロー一味への新たなメンバーの加入を示唆している。州長官の料理人がリトル・ジョンと戦い、引き分けに終わると、リトル・ジョンは料理人を誘って緑の森と一緒に来るよう告げる。その際、年に二回衣服を新調し、二〇マルクの給金を与えることを申し出る(一七〇～一七一連)。この点はマデイコット説を説明した際に、既に述べた通りである。また、リトル・ジョンはあまりに薄着でみすぼらしい騎士に衣服を提供しようロビンに進言するが(七〇連)、それによって騎士はロビンの手下になる。同様に、ノッティンガムの州長官が森で捕まった時、州長官は靴下、靴、衣服、コートを脱がされ、緑のマントを支給される。

かれらが食事をしっかりとると

When they had souped well,

日はとつぷりと暮れていた

The day was al gone ;

ロビンはリトル・ジョンに

Robyn commandyd Litell Johnn

代官の靴下と靴を脱がせ

To drawe of his hosen and his shone,

(第一九三連)

上着と立派な毛皮のついた

His kirtell, and his cote of pie,

短い外套を脱がせ

That was fured well and fine,

緑のマントを持ってきて

And toke hym a grene mantel,

代官の身を包めと言ひ渡す

To lap his body therein.

(第一九四連)

その後、上述のように、ロビンは州長官にアウトローになる方法を教えてやろうと申し出る（一九九連）。オルグレンによれば、これは事実上、州長官を徒弟として新規採用することの意味しているのである。

最後に、ロビンがエドワード王に出会った時、ロビンは緑の布地を三三ヤール国王に売り渡す（四一八連）。

「いま余に売れる」と我らが王

‘Haste thou ony grene cloth,’ sayd our kynge,

「緑の布地はあるか」

‘That thou wylte sell nowe to me?’

「はい、誓って」とロビン

‘Ye, for God,’ sayd Robyn,

「三〇と三ヤールでございます」

‘Thyrty yerdes and thre.’

(第四一八連)

「ロビン」と我らが王

‘Robyn,’ sayd our kynge,

「頼みだが

‘Now pray I the,

その布地を余と余の家来に

Sell me some of that cloth,

少々売ってはくれまいか」

To me and my meyne.

(第四一九連)

そして、既述のように、王とその騎士たちはリンカン・グリーン⁽²⁸⁾の衣服に着替え、ノッティンガムへと向かうのである(第四二一〜四二二連)。

(vi) 誓約違反

ギルドでは、真実に反して誓いをたてることは大罪に相当し、除名に至ることもあった。『武勲』では、所持金の額を尋ねられた客人が正直にその額を告げると、かれは金銭の強奪をまぬがれた(第三八〜四三連)。

「本当のことを言つて下され」とロビン

‘Tel me truth,’ than saide Robyn,

「そうすれば神も慈悲をかけるでしょう」

‘So God have parte of the.’

「わしには一〇シリングしかないのだ」

‘I have no more but ten shelynges,’

と騎士

sayde the knyght,

「だから神も味方してくれるであらう」

‘So God have parte of me.’

(第三九連)

これに関連して、州長官がロビンに危害をくわえない、あるいはロビンの手下を傷つけないと約束するものの(第二〇二〜二〇四連)、弓の試合後、ロビン一味を攻撃し、リトル・ジョンは重傷を負う場面(第三〇一〜三〇二連)が想起される。第二九七連では、ロビン・フッドは州長官が森でおこなった誓約を破ったので驚いている。⁽²⁹⁾

「ハ」ん畜生 高慢な代官め

‘And wo be thou, thou proude sheryf,

これが客のもてなし方か

Thus gladlyngge thy gest ;

お前は向こうの未開の森で

Other wyse thou behote me

まるで違う約束をしたではないか

In yonder wyldre forest.

(第二九七連)

こうしたロビンの反応にもギルドの慣行の一端がみてとれる。

(vii) プロセツションあるいはライディング

ギルドの重要な機能のひとつは、市長、代官、国王といった高位にある者がロンドンに入城する際に、出迎え、護衛するため、騎乗していわゆるプロセツション（行進行列）に参加することである。一三九九年、ヘンリ四世の戴冠式でプロセツションが行われた際には、「新しい国王は、お仕着せと頭巾をかぶったおびただしい数のジェントルマンとその奉公人によって護衛されていた。ウォードンらに先導されたロンドンの各種同業者組合は、立派なお仕着せを身にまとい、組合の旗を掲げていた」⁽⁸¹⁾。同様のライディング（騎馬行進）は、ロビンとその一味が全員リンカン・グリーンのお仕着せを着用し、国王エドワードにつき従ってシャーウッドからノッティンガムに入城する場面にてとれる（第四二二～四二七連）⁽⁸²⁾。

ノッティンガムの人びとは

All the people of Noyngnam

立ってじっと眺めていた

They stode and beheld,

かれらの目には野をおおう

They sawe nothyngge but mantels of grene

緑のマントしか映らなかつた

That covered all the felde.

(第四二七連)

また、『武勲』には会話体が多用されるところから、商人ギルドのギルドホールにおいて吟遊楽人によって朗誦、否、劇として演じられた可能性もないわけではないが、これもギルドの慣行のひとつである「余興」に対応する。⁽⁸⁾

(viii) 金銭の貸与

金貸しは『武勲』のなかでは重要なエピソードのひとつとなっている。ロビンは破産した騎士サー・リチャード・アット・ザ・リーに四〇〇ポンドを貸与するが、この援助が「貸与^{ローン}」という形をとっていて、純然たる贈与ではない点に留意する必要がある。この場面は、騎士が物心両面で「気前のよさ」によって称賛を浴びる慣行と著しい対照をなしている。商人の観念形態では、「気前のよさ」という騎士の美德は、返済されるべき金銭の貸与へとかたちを変えているのである。

騎士は大修道院長から抵当におさええられていた土地を取り戻すため、四〇〇ポンドを納めなければならなかった（第五四〜五五連）。その金を騎士はロビンから借りることになるが、それには保証人が必要であった。ロビンは騎士が告げた「十字架で死んだ御仁」（第六二連）やペテロ、パウロ、ヨハネではだめだという。「もつとましな保証人を探さない／でないと金など手に入りませんぞ」（第六四連）とロビンは続ける。サー・リチャードが「敬愛する聖母マリア様」（第六六連）ではどうかと申し出ると、聖母マリアを敬愛するロビンは心底それに賛同する。ここでも聖母マリアは重要な役割を演じている。

そして、リトル・ジョンに金蔵からよく数えて四〇〇ポンドを持って来るよう命ずるのである（第六七連）。なぜならば、それは「貧苦に堕ちた高潔の騎士を／助けるための施し」（第六九連）だからである。不幸なメンバーに対する慈善行為ないしは義援金の提供はギルドの重要な機能のひとつであったが、第六九連にはそれがみてとれる。

返済期日は「一二ヶ月後の今日」（第七九連）ということ、ふたりは合意する。騎士の返済が遅れると、ロビンは

二度にわたり、苛立ちを隠せない様子でこう述べる。「どうも聖母様は御立腹のようだぞ／まだ金を返しに来ぬではないか」(第二〇六連)。「われらの聖母様はお怒りの御様子で／わしが貸した金 いまだ届けて下さらぬ」(第二三五連)。ロビンは保証人の要求にあたって、返済期日に関してもうるさいように思われるが、これはギルドの慣習に従っているのである。⁽³²⁾

(ix) 商人の諸活動

ロビンの騎士への援助は続く。既述のように、リトル・ジョンは騎士の衣服が「あまりに薄着」であるがゆえに、衣服を与えるようロビンに進言している(第七〇連)。そして、こう続ける。

「お頭^{かしら} あなたは緋色や緑の

豪華な衣服をたくさんお持ちで

察するにこのうまし国イングラントで

これほど豊かな商人もありますまい」

(第七一連)

「この方ほどの色の布地もニヤール

しっかり測ってさし上げろ」

リトル・ジョンは木の弓以外の

物差しを使ったことがなかったのだ

(第七二連)

そしてかれが測るたびに

‘For ye have scarlet and grene, mayster,

And many a riche aray ;

There is no marchaunt in mery Englund

So ryche, Idare well say.’

‘Take hym thre yerdes of every colour,

And loke well mete that it be.’

Lytell Johnn toke none other mesure

But his bowe tree.

And at every handfull that he met

三フイート分とばして多めに測る

He leped footes three ;

「なんといい加減な反物屋だ」と

'What devyll's drapar,' sayid

リトル・マック

Itell Mache,

「自分ではそうは思わぬか」

'Thynkest thou for to be?'

(第七三連)

ここにはいくつかの重要な論点がかくされている。第一に、ロビンは騎士に衣服を支給し、身支度させることにより、騎士を「自分の」家来として抱え込んでいるのである。騎士はのちに州長官と争った際に、ロビンとその一味を自分の城内にかくまい、みずからの騎士勤務を遂行する(三一―一連)。第二に、ロビンが「豪華な衣服をたくさん」(第七一連)持った富裕な反物商とみなされていることは明白である。国王エドワードに緑の布地を三三ヤール売っている時、ロビンはいうまでもなく自分の商いをおこなっているのである(第四一八―四二〇連)。第三に、ロビンがリトル・ジョンに布地をよく注意して測るように命じ、それに対してリトル・ジョンが自分の長弓でかなりいい加減に測る時(第七二―七三連)、両者は親方と徒弟の役割を演じている。この場面は親方と職人との軋轢をドラマ化している。第四に、リトル・ジョンは布地を測るのに物差しを使わず、長弓を使っているが(第七二連)、そうすることで、かれは地方都市の反物商に標準的な物差しを押しつけようとする既存の織物ギルドの権威に抵抗しているのである。⁽⁸⁴⁾

(x) 反物の販売

反物や各種の衣類への言及が数多くあることは注目に値する。これは反物の製造、わけても反物の小売りに対して特別な関心が払われていたことを物語っている。衣類の品目は「頭巾」(hode)、「マント」(mantel)、「上着」(kirtell)から「短い外套」(cole of pie)、「ズボン」(breche)、「シャツ」(schert)、「僧衣」(cole)にまで及ぶ。各種の反物とその独

特な色にも言及されている。すなわち、「緋と緑」(scarlet and grene)、「緋と縞」(scarlet and of raye)、「白と赤」(whyte and rede)、「灰色」(graye)、「黒」(blacke)、「緑」(grene)、「リンカン・グリーン」(Lyncolne grene)がそれである。実際、国王エドワードがロビンに緑の布地を持っているかと尋ねる場面では、ロビンは反物商の役割を割り当てられているのである(第四一八〜四一九連)⁽⁸⁵⁾。

以上にみたようなオルグレンの見方は、従来指摘されてきた『武勲』の大きな特色である騎士道精神に代わって、ギルド的な商業主義ないしは商人気質を強調する点で、興味深いものがある。

もとよりオルグレンは、『武勲』を生み出した歴史的原動力として商業主義のほかに弓術、庶子封建制、そして犯罪者集団を挙げている⁽⁸⁶⁾。なかでも、弓術に関して言えば、エドワード三世は勅令を発して、休日や祝祭日に弓術の練習をし、その技を習得するよう命じた。それを管轄した州長官は、腕のよい弓兵を補充するため、かかる機会を利用して地方の有能な人材の発掘につとめたのである。その背景には、スコットランドやフランスにおける対外戦争があった⁽⁸⁷⁾。

また、『武勲』は一二世紀および一三世紀に厳格に施行されたといわれるフォレスト法については、ひとことも触れていない。このことはフォレストの境界をめぐる係争がなくなった一四世紀の時代状況を反映しているとオルグレンはみる。しかし、鹿の密猟はおこなわれていた。ランカシャをくまなく巡行したエドワード王は、プロンプトン・パークで多くの鹿に逃げられた(第三五七連)。同パークで王は鹿の大群に遭遇することを期待していたのであるが、立派な角をもった鹿はほとんどいなかった(第三五八連)。

このくだりは、おそらくロビン一味による鹿の密猟があったことを暗示している。最終的には、王はロビン・フッドに赦しを与えて大団円となる(第四一四連)。オルグレンによれば、これはエドワード三世が一三六九年に援助金の提供と引き換えにフォレスト犯罪者に与えた特赦を指している⁽⁸⁸⁾という。その当否はここでは問わないが、ロビン・フッド率いるアウトロー集団が根城にしていた森は、ロビン伝説の成立事情を考える上でも重要な問題を投げかけている。

むすびにかえて

最近、アンソニー・ポラードは従来の研究者とは異なり、文字で記された現存するロビン・フッド物語は一五世紀のものであるという事実を重視し、当時の聴衆にとっては、一三世紀及び一四世紀初期の社会的・政治的緊張状態はすでに無関係のものとなっていたとして、種々の議論を展開している。⁽³⁵⁾ 論点はいくつかあるが、なかでも筆者にとって興味深いのは、ロビン一味がアウトローの宣告を受けた「森のヨーマン」であり、「ヨーマン・フォレスト」であったという点である。こうしたポラードの見方からすれば、本来、王の森に棲息する鹿をまもるべき役割を担っていたフォレストアスターが、現今、アウトローとなって王の鹿をかすめ喰らって生計をたてているという、なんとも皮肉なことになると同時に、修道士に扮した国王が、こともあろうにアウトローたちの手で殺された王の鹿で饗応されるという場面（『武勲』第三八七〜三九三連）が想起される。こうしたアイロニーもロビン・フッド物語の大きな魅力のひとつになっている。

ともあれ、多義的な「ヨーマン」なることばの解釈が論者によってまちまちであることが明らかである。それがまたロビン一味の性格のちがいがい、ひいてはバラッド全体の解釈のちがいを生んでいるといえよう。ロビン物語の聴衆についても、研究者のコンセンサスを得ていないが、今日ではロビン・フッド・バラッドの聴衆は特定の社会層ではなく、種々雑多な人びとからなっていたと考えられているようである。⁽³⁶⁾

ロビン伝説の起源に関して言えば、本稿では一四世紀起源説を中心にみてきたが、このことは必ずしも一三世紀起源説の否定を意味しない。むしろ、一三世紀か一四世紀か、といった二者択一的なとらえ方ではなく、バラッドの主題のなかには一三世紀に起源をもつものもあれば、一四世紀の相を呈しているものもあると考えるのが妥当ではないだろう。

か。さらに、右にみたポラード的な見方に接すると、ロビン伝説の諸起源はじつに複雑で、一筋縄ではいかないとの印象を受ける。

ロビン・フッド伝説が一二六〇年代にバークシャに入り込んでいたとしても、周知の『農夫ピアズ』（一三三七年頃）までにはゆうに一世紀以上もの時間的隔たりがあり、その間に伝説の人気の高まりを窺わせるものがまったく残っていないという事実には、驚きを禁じ得ない⁽⁹¹⁾。また、一二六〇年代にロビン・フッド伝説がすでに流布していたものと仮定して、はたしてその内容はどのようなものであったのか、史料が残存していないこともあり、皆目見当がつかないのである⁽⁹²⁾。換言すれば、一二六二年よりどれだけ過去にさかのぼってロビン伝説が誕生し、当初はどのようなかたちをとっていたのか、知るすべがないのである。

ロビン・フッドの史実在性を探究したデイヴィッド・クルックによれば、一二二五年の巡回裁判に最初に登場するかの「逃亡者」ロバート・フッドとヨークシャのアウトローたるロバート・オヴ・ウイザビは同一人物である可能性がある。だが、クルック自身も認めているように、それを立証することは不可能なのである。また、ドブソンが指摘しているように、かれ、もしくはかれらの人物像についてはまったくといってよいほどわからないうえ、その犯罪行為が伝説を生むに足るほど重大なものであったことを示す証拠も残っていない⁽⁹³⁾。われわれは「逃亡者」という記載からア・プリオリに犯罪者を想定しがちであるが、当人が実際に犯罪をおかして逃亡したのかどうかについては、必ずしも自明なことではない。ここにもひとつの大きな陥穽がひそんでいるように思われる。

従来、ロビン・フッド伝説は農村を背景として誕生したものと考えられていたが、本稿でみたように、近年、都市の文脈のなかでとらえる見方がひとつの大きな潮流をなしている⁽⁹⁴⁾。とはいえ、一九六〇年代の論争において口火を切ったヒルトンの学説も再考の余地があるように思われる。というのも、一三八一年のいわゆる「農民一揆」には、その名称とは裏腹に、「都市」民が深く関与していたからである⁽⁹⁵⁾。

もとより、ロビン・フッド物語は歴史的ないしは社会学的なデータの単なる集積ではないし、それが生み出された社会の単なる反映でもない。「歴史」は文学の発展のなかで歪められ、いくつもの異なる伝承の層で覆われているのかもしれないのである。⁽³⁷⁾ それだけに、検討すべき課題は多い。筆者にとつては中世を通じてアウトローのすみかであった「森」の問題も、そのひとつである。

歴史のなかのロビン・フッドは依然として多くの謎に包まれている。

註

- (1) 邦語文献では、以下を参照。上野美子『ロビン・フッド伝説』研究社、一九八八年・同『ロビン・フッド物語』岩波新書、一九九八年・同『物語の記憶』(第Ⅲ部 ロビン・フッド) 学術叢書、二〇一一年・川崎寿彦『森のイングランド』平凡社、一九八七年・J・C・ハウルト、有光秀行訳『ロビン・フッド』みずす書房、一九九四年・ジョン・ベラミ、鈴木利章・赤坂俊一訳『ロビン・フッド』法律文化社、一九九二年・J・C・ハウルト、朝治啓三訳『ロビン・フッド』(J・C・ハウルト、城戸毅監訳『J・C・ハウルト歴史学論集、中世イギリスの法と社会』刀水書房、一九九三年所載)・アンソニー・ポラード、朝治啓三・有光秀行訳『卑俗な話』初期のロビン・フッド物語』『歴史』、第一〇四輯、二〇〇五年、一〇八―一二二頁。

- (2) R. H. Hilton, "The Origins of Robin Hood", *Past and Present*, vol. 14, 1958, p. 42; ヒルトンの当論文をはじめ、本稿でとりあげる重要な論文は、次に再録されている。R. H. Hilton, ed. *Peasants, Knights and Heretics: Studies in Medieval English History*, Cambridge, 1976; Stephen Knight, ed. *Robin Hood: an Anthology of Scholarship and Criticism*, Woodbridge, Suffolk, 1999.

- (3) Maurice Keen, "Robin Hood: A Peasant Hero", *History Today*, 41, October 1958, pp. 684-9; *idem*, "Robin Hood-

Peasant or Gentleman?”, *Past and Present*, vol.19, 1961, pp.7-15 ; *idem.*, *The Outlaws of Medieval Legend*, London, 1961.

(4) J. C. Holt, “The Origins and Audience of the Ballads of Robin Hood”, *Past and Present*, vol.18, 1960, p.90.

(5) J. C. Holt, “Robin Hood-Some Comments”, *Past and Present*, vol.19, 1961, pp.16-8.

(6) J. C. Holt, *Robin Hood*, revised and enlarged, London, 1982, 1989 (有光秀行「前掲訳書」) ; *idem.*, “Robin Hood Revised”, *Alumni Magazine Consortium*, February 1984, pp.xii-xvi ; *idem.*, “Robin Hood : The Origins of the Legend”, in *Robin Hood : The Many Faces of that Celebrated Outlaw*, ed. K. Carpenter, Oldenburg, 1995, pp.27-34 ; ホウルトは一二二五年のかのロバート・フットが、伝説上の人物になった可能性があることを示唆している。しかしながら、今日我々が知っているロビン・フット伝説は複数のロビン・フットにその源をもつことはほぼ確実であるとして、オリジナルのロビン・フットが一人だけではないと述べている。要するに、ロビン伝説の形成に貢献したロビン・フットは大勢いたるところわけである。この点について J. C. Holt, “Robin Hood : The Origins of the Legend”, p.29 ; *idem.*, “Hood, Robin in *Oxford Dictionary of National Biography*, ed. H. C. G. Matthew and Brian Harrison, Volume 27, Oxford University Press, 2004, p.927 ; *idem.*, *Robin Hood*, p.190 (有光秀行「前掲訳書」三二三頁) 参照。

(7) J. C. Holt, “The Origins and Audience of the Ballads of Robin Hood”, p.103.

(8) T. H. Aston, “Robin Hood. Communication”, *Past and Present*, vol.20, 1961, pp.7-9.

(9) Maurice Keen, *The Outlaws of Medieval Legend*, 2nd edn, London, 1977.

(10) R. B. Dobson and J. Taylor, *Rymes of Robyn Hood : An Introduction to the English Outlaw*, Sutton Publishing Limited, revised edition, 1997, p. xxxiii.

(11) R. B. Dobson and J. Taylor, “The Medieval Origins of the Robin Hood Legend : A Reassessment”, *Northern History*, 7,

1972, pp. 29-30.

- (12) R. B. Dobson and J. Taylor, "Robin Hood of Barnesdale : a fellow thou has long sought", review of *Robin Hood* by J. C. Holt in *Northern History*, 19, 1983, p. 218.
- (13) R. B. Dobson and J. Taylor, *Rymes of Robyn Hood*, p. 36.
- (14) R. B. Dobson and J. Taylor, "The Medieval Origins of the Robin Hood Legend : A Reassessment", p. 28.
- (15) David Crook, "Some Further Evidence Concerning the Dating of the Origins of the Legend of Robin Hood", *English Historical Review*, XCIX, 1984, pp. 530-4.
- (16) David Crook, "The Sheriff of Nottingham and Robin Hood : The Genesis of the Legend?" in *Thirteenth Century England II*, ed. P. R. Coss and S. D. Lloyd, Woodbridge, 1988, pp. 59-68. デイヴィッド・クルックは当該論文の冒頭に「およそ一三〇〇年以前に多くの『Robinhood』姓が発見されたことにより、『ロビン・フッド』伝説の一四世紀起源説を証明しようとしている諸々の解釈に有効な終止符が打たれたとして、『J・R・マデイコットならびにJ・G・メラニの主張をしりぞけ、『ロビン』伝説の起源を一三世紀に求めるJ・C・ホウルトの主張を擁護している。
- (17) *Ibid.*, p. 67, n. 68.
- (18) *Ibid.*, p. 67, n. 69.
- (19) *Ibid.*, p. 67.
- (20) *Ibid.*, p. 68.
- (21) J. R. Maddicott, "The Birth and Setting of the Ballads of Robin Hood", *English Historical Review*, XCIII, 1978, p. 278.
- (22) 以下、『武勳』をはじめとするバラッドの引用はすべて R. B. Dobson and J. Taylor, *Rymes of Robyn Hood* 所収のテキストに拠る。邦訳は基本的に杉野 徹訳（『EURO』第六号、一九八二年・第七号、一九八三年）に拠るが、必

要に応じて改変した。なお、改訳に際しては、金山 崇「中世ロビン・フッド小伝抄訳」『世界口承文芸研究』一九七九年、同「中世ロビン・フッド小伝 続」『世界口承文芸研究』、一九八二年；Stephen Knight and Thomas Ohlgren, ed. *Robin Hood and Other Outlaw Tales*, Kalamazoo, Michigan, 2000；Thomas H. Ohlgren, “A Gest of Robyn Hode”, in *Medieval Outlaws, Ten Tales in Modern English*, ed. Thomas H. Ohlgren, Sutton Publishing Limited, 1998, pp. 216-238；*The Gest of Robin Hood*, verse translation by Robert L. Frank, 1974, Oakland, California や参照した。

- (23) K. B. McFarlane, *The Nobility of Later Medieval England*, Oxford, 1973, p. 107, n. 3.
- (24) J. R. Maddicott, *op. cit.*, pp. 278-9.
- (25) *Ibid.*, p. 279.
- (26) *Ibid.*, p. 279.
- (27) *Ibid.*, p. 280.
- (28) *Ibid.*, p. 280.
- (29) *Ibid.*, pp. 280, 293.
- (30) *Ibid.*, pp. 282-294.
- (31) *Ibid.*, p. 294.
- (32) *Ibid.*, p. 298；J. R. Maddicott, “Poem of Social Protest in Early Fourteenth-century England”, in *England in the Fourteenth Century : Proceedings of the 1985 Harlaxton Symposium*, ed. M. Ormrod, Woodbridge, 1986, pp. 130-144；フォルヴィル団及びロウテネル団の伝説’ E. L. G. Stones, “The Folvilles of Ashby-Folville, Leicestershire, and their associates in crime, 1326-1341”, *Transactions of the Royal Historical Society*, VII, 1957, pp. 117-36；J. G,

- Bellamy, "The Cotere! gang : an anatomy of a band of fourteenth-century criminals", *English Historical Review*, LXXIX, 1964, pp. 698-717 ; 『武勳』にみられるような国王裁判官の悪弊は一四世紀の時代状況にもっともよく合致している。この点については W. M. Ormrod, *Political Life in Medieval England, 1300-1450*, Basingstoke, 1995, p. 125 ; E. Powell, "Law and Justice", in *Fifteenth-Century Attitudes : Perceptions of Society in late medieval England*, ed. R. Horrox, Cambridge, 1994, p. 36 を参照 ; ブレイロットによれば、一四世紀において国王政府が治安の改善に最大限の努力を払っていた時期は一三二七―一三四〇年であった。John. R. Maddicott, *Law and Lordship : Royal Justices as Retainers in Thirteenth and Fourteenth-century England*, Oxford, 1978, pp. 17-18, 22-25, 41-42 ; 一五世紀に編纂された初期のロビン・フット・ブラッド群にみられるロビン伝説の基本的な諸要素は、一四世紀初期の歴史的状况にもっとも適合的であるという主張はマッソンによってもなされている。A. Musson, *Public Order and Law Enforcement : The Local Administration of Criminal Justice, 1294-1350*, Woodbridge, 1996, pp. 257-8 ; なお、一四世紀前半の抵抗詩については、浜林正夫「イギリス中世民衆詩の社会思想」『一橋大学研究年報、経済学研究』、第一九号、一九七五年、二四―三三頁参照。
- (33) J. G. Bellamy, *Robin Hood : An Historical Enquiry*, London, 1985 (鈴木利章・赤坂俊一、前掲訳書)。
- (34) J. G. Bellamy, *Crime and public Order in England in the Later Middle Ages*, London, 1973, p. 88.
- (35) P. R. Coss, "Aspects of Cultural Diffusion in Medieval England : the Early Romances, Local Society and Robin Hood", *Past and Present*, vol. 108, 1985, pp. 75-6.
- (36) Stephen Knight and Thomas Ohlgren, *op. cit.*, p. 82.
- (37) C. Richmond, "An Outlaw and Some Peasants : the Possible Significance of Robin Hood", *Nottingham Medieval Studies*, XXXVII, 1993, p. 98.

- (38) Barbara A. Hanawalt, "Ballads and Bandits. Fourteenth-Century Outlaws and the Robin Hood Poems", in *Chaucer's England : Literature in Historical Context*, ed. Barbara A. Hanawalt, Minneapolis, University of Minnesota Press, 1992, p. 157.
- (39) *Ibid.*, pp. 157-8.
- (40) *Ibid.*, p. 158.
- (41) *Ibid.*, pp. 160-1.
- (42) *Ibid.*, p. 160.
- (43) *Ibid.*, pp. 161-2.
- (44) *Ibid.*, pp. 164-5.
- (45) *Ibid.*, pp. 165.
- (46) *Ibid.*, pp. 165.
- (47) *Ibid.*, pp. 157.
- (48) Kelly DeVries, "Longbow Archery and the Earliest Robin Hood Legends", in *Robin Hood in Popular Culture : Violence, Transgression, and Justice*, ed. Thomas Hahn, Cambridge, 2000, p. 55 ; Dean A. Hoffman, "'With the Shot Y Myll/Alle Thy Lustes to Full-Fyl' : Archery as Symbol in the Early Ballads of Robin Hood", *Neuphilologische Mitteilungen*, 86, 1985, p. 498.
- (49) Kelly DeVries, *op. cit.*, pp. 54-5 ; Dean A. Hoffman, *op. cit.*, p. 499.
- (50) Kelly DeVries, *op. cit.*, p. 55 ; Dean A. Hoffman, *op. cit.*, pp. 499-500.
- (51) Kelly DeVries, *op. cit.*, pp. 56-7 ; Dean A. Hoffman, *op. cit.*, pp. 501-2.

- (22) *Ibid.*, p. 502 ; ホノマンは弓の試合をアウトローの秩序回復のための手段とみる。この点については、John Block Friedman, “Robin Hood and the Social Context of Late Medieval Archery”, in *Robin Hood in Greenwood Wood : Aleriy and Context in the English Outlaw Tradition*, ed. Stephen Knight, Turnhout, Belgium, 2011, p. 67 を参照。
- (23) Kelly DeVries, *op. cit.*, p. 57 ; John Marshall Carter, *Medieval Games : Sports and Recreations in Feudal Society*, Westport, 1992, pp. 78, 85-6.
- (24) Kelly DeVries, *op. cit.*, p. 46.
- (25) J. C. Holt, *Robin Hood*, London, 1982, pp. 78-9.
- (26) Kelly DeVries, *op. cit.*, pp. 58-9. ヌッフリースはロビン・フッド伝説の一二世紀起源説をやりわりと否定している。長己の歴史たごころは、むしろ以下を参照。 Jim Bradbury, *The Medieval Archer*, Woodbridge, 1985, pp. 91-138 ; T. H. McGuffie, “The Longbow as a Decisive Weapon”, *History Today*, 5, 1955, pp. 737-41 ; Clifford J. Rogers, “The Military Revolution of the Hundred Years War”, *Journal of Military History*, 57, 1993, pp. 249-51 ; Kelly DeVries, *Medieval Military Technology*, Peterborough, 1992, pp. 37-9.
- (27) Andrew Ayton, “Military Service and the Development of the Robin Hood Legend in the Fourteenth Century”, *Nottingham Medieval Studies*, XXXVI, 1992, p. 128.
- (28) *Ibid.*, p. 129.
- (29) *Ibid.*, p. 136.
- (30) *Ibid.*, pp. 136-7 ; プレストウィッチによれば、騎馬の射手は一二三〇年代に出現し、歩兵部隊に真の革命をもたらした (Michael Prestwich, *Armies and Warfare in the Middle Ages : The English Experience*, New Haven, 1996, pp. 134-5)。
- ドゥフリースによれば、この所謂「ヨーロッパ・アーチャー」は自前で馬を手配・出征したが、かれらの軍務に対

する報酬は他の兵士に比べれば多額であった。ロビン・フッドは、まさにこうした「ヨーマン・アーチャー」にほかならない (Kelly DeVries, *op. cit.*, p. 53)。アンドリュウ・エイトンはモリス・キーンの定義を引用し、「ヨーマン」を小土地保有者で、ジェントリではないが、普通の農民よりは上位にあるものにとらえている (Andrew Ayton, *Knights and Warhorses : Military Service and the English Aristocracy under Edward III*, Woodbridge, 1994, reprinted in Paperback, 1999, p. 16 ; Maurice Keen, *The Outlaws of Medieval Legend*, revised paperback edition, London, 1987, p. xvii)。ちなみにエドワード一世の時代、従軍した伯の日当はハシリング、騎士のそれは二ないし三シリングであった。また、徒歩の射手の日当は二ペンスで、騎馬の射手のそれはその二倍であった。これがエドワード三世治世期になると、射手の場合、それぞれ三ペンス、六ペンスに上昇したといわれる (Scott L. Waugh, *England in the Reign of Edward III*, Cambridge University Press, 1991, p. 175)。

- (61) Andrew Ayton, *op. cit.*, p. 140.
- (62) *Ibid.*, p. 143.
- (63) *Ibid.*, p. 144.
- (64) *Ibid.*, p. 146.
- (65) H. J. Hewitt, *The Organization of War under Edward III*, Oxford, 1975, pp. 29-30, 34.
- (66) Stephen Knight, *Robin Hood : A Complete Study of the English Outlaw*, Oxford, 1994, p. 54 ; Stephen Knight and Thomas Ohlgren, *op. cit.*, p. 8.
- (67) Richard Tardif, “The ‘Mystery’ of Robin Hood : A New Social Context for the Texts”, in *Worlds and Words : Studies in the Social Role of Verbal Culture*, ed. Stephen Knight and S. N. Mukherjee, Sydney, 1983, pp. 130-45.
- (68) Michael Nerlich, *Ideology of Adventure : Studies in Modern Consciousness, 1100-1750*, trans. Ruth Crowley, 2 vols.,

Minneapolis, 1987, vol. 1, pp. 60-9.

- (69) Thomas H. Ohlgren, "Edwardus redivivus in *A Gest of Robyn Hode* ", *Journal of English and Germanic Philology*, 99, January 2000, pp. 2, 26-28 ; *idem.*, ed. *Medieval Outlaws*, p. 217.

- (70) Thomas H. Ohlgren, "Edwardus redivivus in *A Gest of Robyn Hode* ", p. 28.

- (71) Thomas H. Ohlgren, "The 'Marchaunt' of Sherwood : Mercantile Ideology in *A Gest of Robyn Hode* ", in ed. Thomas Hahn, *op. cit.*, p. 178 ; 下記の関連項目へ Thomas H. Ohlgren, *Robin Hood : The Early Poems, 1465-1560*, Newark : University of Delaware Press, 2007, pp. 135-182 (4. The "Marchaunt" of Sherwood : Mercantile Adventure in *A Lytell Geste of Robyn Hode*) を併せて参照。同様に「オルグレンは『ロビン・フッドと陶工』を商人の冒険譚として読み解く。これについては Thomas H. Ohlgren, "Merchant Adventure in *Robin Hood and the Potter* ", in *Robin Hood : Medieval and Post-Medieval*, ed. Helen Phillips, Portland, 2005, pp. 69-78 ; なお、オルグレンは別稿 (Thomas H. Ohlgren, "Richard Call, the Pastons, and the Manuscript Context of *Robin Hood and the Potter*" (Cambridge, University Library Ee. 4. 35. 1) ", *Nottingham Medieval Studies*, 45, 2002, pp. 210-28) において『ロビン・フッドと陶工』の写本を仔細に検討し、当写本がノーフォークにおいて一六世紀の初めではなく、一五世紀の第三四半期に編纂されたこと、また、当写本は商人としてのすぐれた資質を兼ね備えた出世欲の強いヨーロッパ人である、かのパストン家の使用人リチャード・コールによって所有されていたこと等をつきとめた。

- (72) Thomas H. Ohlgren, ed. *Medieval Outlaws*, p. 219.

- (73) Thomas H. Ohlgren, "The 'Marchaunt' of Sherwood ", pp. 179-180.

- (74) *Ibid.*, pp. 180-1.

- (75) *Ibid.*, pp. 181-2.

- (76) *Ibid.*, p. 182.
- (77) *Ibid.*, pp. 182-3.
- (78) Thomas H. Ohlgren, ed. *Medieval Outlaws*, p. 316, n. 12.
- (79) Thomas H. Ohlgren, “The ‘Marchaunt’ of Sherwood”, p. 184.
- (80) William Herbert, *The History of the Twelve Great Livery Companies of London*, 2 vols, London, 1834 and 1837, repr. New York, 1968, vol. 1, p. 90.
- (81) Thomas H. Ohlgren, “The ‘Marchaunt’ of Sherwood”, p. 185.
- (82) *Ibid.*, pp. 184-5.
- (83) *Ibid.*, p. 186.
- (84) *Ibid.*, pp. 187-8.
- (85) *Ibid.*, pp. 188-9.
- (86) Thomas H. Ohlgren, “Edwardus redivivus in *A Gest of Robyn Hode*”, pp. 12-26.
- (87) *Ibid.*, p. 13.
- (88) *Ibid.*, p. 14.
- (89) Richard Almond and A. J. Pollard, “The Yeomanry of Robin Hood and Social Terminology in Fifteenth-Century England”, *Past and Present*, vol. 170, 2001, pp. 52-77 ; A. J. Pollard, *Imaging Robin Hood : The Late-Medieval Stories in Historical Context*, Abingdon, 2004 ; マンナー・ポラーズ 朝治啓三・有光秀行、前掲訳 ; A. J. Pollard, “Robin Hood, Sherwood Forest and the Sheriff of Nottingham”, *Nottingham Medieval Studies*, LII, 2008, pp. 113-130 ; *idem*, “Political Ideology in the Early Stories of Robin Hood” in *Outlaws in Medieval and Early Modern England : Crime,*

Government and Society; c. 1066-c. 1600, ed. John C. Appleby and Paul Dalton, Farnham, Surrey, 2009, pp. 111-128.

- (90) Stephen Knight and Thomas Ohlgren, *op. cit.*, p. 82; Douglas Gray, "Everybody's Robin Hood", in ed. Helen Phillips, *op. cit.*, p. 30; なお「ロビン物語の聴衆は元来、生まれのよいジェントルマンあるいはヨーマンであったと主張するハウルトも、一五世紀末までには聴衆はあらゆる社会階層に及んでいたと述べている (J. C. Holt, *Robin Hood*, 1982, 1989, p. 111; 有光秀行、前掲訳書、一七九頁)。

- (91) R. B. Dobson and J. Taylor, *Kynges of Robin Hood*, p. xxxii.

- (92) Douglas Gray, *op. cit.*, p. 25.

- (93) R. B. Dobson, "Robin Hood: The Genesis of a Popular Hero", in ed. Thomas Hahn, *op. cit.*, p. 76. ドブソンはまた「ロビン・フッド」あるいは「ロビンフッド」という名前が必ずしも確固たる伝説と結びつくものではなく、逃亡者もしくはアウトローのあだ名にすぎなかった可能性を示唆している。ここにはハウルトやクルックに対する批判がこめられている。すなわち、ハウルトやクルックは「ロビンフッド」や「ホウブフッド」の名前の背後に広範なアウトロー伝説の流布をみるのに対して、ドブソンはポピュラーなあだ名に伝説が随伴することはめつたにないという (*Ibid.*, p. 76)。なお「ステイーヴン・ナイトは「ロビン・フッドは一人の實在した人物ではなく、複数の架空の人物の寄せ集めであるとして (Stephen Knight, *op. cit.*, p. 15)」「ロビン・フッドの史的實在性を否定している。

- (94) この点ではヒルトン、ハウルトも同様である。「ロビンは都市を背景に生まれたのではなく」(J. C. Holt, *Robin Hood*, London, 1982, 1989, p. 147; 有光秀行、前掲訳書、二三〇頁)。

- (95) 同じように都市の文脈でロビン伝説を読み解くにしても、ターデイフが『武勳』の聴衆をギルドへの入会を拒否された職人や徒弟といった都市の下層階級に限定しているのに対して (Richard Tardi, *op. cit.*, pp. 131-5)「オルグ

レンはギルドの親方や商人階級をも含めた広義の都市民を想定している(Thomas H. Ohlgren, “The ‘Marchaunt’ of Sherwood : Mercantile Ideology ”, pp. 176-8)。

(96) R. B. Dobson, *The Peasants' Revolt of 1381*, London, 1970, pp. 13-15 ; P. J. P. Goldberg, *Medieval England : A Social History 1250-1550*, Oxford University Press, 2004, p. 178.

(97) Douglas Gray, *op. cit.*, pp. 28-9.